



ICT 海外ボランティア会会報

No. 66

2016年9月18日(日)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : info@ictov.jp

目次

◆巻頭言

ICT 海外ボランティア会の皆様へ

NTT 東日本 IT イノベーション部国際室長 長江 靖行氏

◆特別寄稿

インデントの勝負は見積もりで決まる

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆海外グラフィティ

イチローが嫌いだ!

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆JICA ボランティア募集

シニア海外ボランティア 秋募集 開始

事務局

◆海外技術協力の思い出

インドネシアで電話線路故障対策に貢献

日永インターナショナル(株) 特別顧問 庄司 新一氏

◆3.11 地震から 5.5 年

東日本大震災復興行脚 3485km<自転車単独日本縦断>

元 NTT ドコモ東京料金センター所長 明石 公夫

◆第 25 回 海外情報談話会模様

事務局

巻頭言

ICT 海外ボランティア会の皆様へ

NTT 東日本 IT イノベーション部国際室長
長江靖行

ICT 海外ボランティア会の皆様、はじめまして、NTT 東日本 IT イノベーション部国際室の長江靖行です。去る7月1日から国際室長を拝命しました。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

当会事務局長の加藤 隆様、会員の庄司新一様から巻頭言執筆のお話を8月初旬に受け、当会のWebサイトを注意深く拝見させて頂きました。私自身、国際協力活動を起点に人材育成されてきた人間そのものであり、昔から大変お世話になった、そして、ご指導いただいた多くの方々が引続き国際協力分野でご活躍されていることを知り、感心と感動を憶えました。

特に、当会主催の第22回海外情報懇談会の意見交換で発言された内容は、多数の海外経験者の想いを集約する重みのある言葉だと実感しました。国際分野で携わる、特に我々現役の社員らは、決して忘れてはいけないことであり、日々業務の中でこの想いを絶やさず活動していかなければならないと思います。

私は、平成元年3次隊インドネシア（初代の電話線路）JOCV（青年海外協力隊）-0B(1990-1992)です。JOCV2次試験の面接官は現NTT東京青年海外協力会代表の北島浩司様でした。北島様の背中を見て育った人間の一人です。インドネシアでは、当時のジャカルタ事務所に田中秀穂様（所長）、阿南修平様（次長）、竹山雅之様（阿南次長後任）がいらっしゃいました。私の任地となった南スマトラ州パレンバンから首都ジャカルタに上京してきた際、いつもお腹いっぱいになるまでご馳走してくださいました。（当時の支給額は310ドル/月で食費、交通費、雑費全て込み、家賃は200ドル/月でした）



スマトラ島へ派遣されたJOCV隊員は私が初めてでした。所長・次長からは「インドネシア人との付き合い方」や「海外生活の●●べからず」を教わりました。今もそれは実践しており、本当に感謝しております。南スマトラ州パレンバンでの730日間の任期を終え帰国後1か月もせず、当時1社時代の国際部が締結したインドネシアPTテレコムとの覚書/SCR(通話完了率)向上プロジェクトのメンバーとして、再び任国インドネシアのパレンバンで活動する機会

を与えて頂きました。同メンバーの北島様、岡本 國様、伊藤 勉様には大変お世話になりました。その後、再び 1995 年から 2004 年迄インドネシア中部ジャワでの KSO(インドネシア語で Kerja sama Operasi の略：共同事業運営)プロジェクトに参加させて頂きました。

帰国後は、経産省主管のジャカルタ市とハノイ市での光通信ビジネスの事業性調査、総務省主管の東ジャワ州マラン市（遠隔教育）と西スマトラ州タナダタル県（遠隔医療相談）での APT(Asia Pacific Telecommunity の略：アジア・パシフィック電気通信共同体)デジタルデバイド解消に向けたパイロットプロジェクト、インドネシア JICA 短期専門家、NTT 独自施策のベトナム国タンロン工業団地・野村ハイフォン工業団地とインドネシア国 EJIP 工業団地での FTTH 実証実験、さらに JICA 研修員受入れ、APT 研修員受入れなどを実施しながら、現在に至るまで国際分野にずっと従事しております。おそらく、現役時代に JOCV、JICA 専門家を経験した人間が NTT グループ各社の国際分野のヘッドになったのは、私が最初ではないかと思えます。それ故、国際協力の実務経験者の一人として、少しでも諸先輩方のアドバイスを実業の中で具現化していければと思えます。

弊社国際室の現在の具体的な取組の一部をご紹介します。

1. セキュリティー分野におけるベトナム国総務省情報セキュリティ担当との共同研究の実施
2. JTEC 様経由による JICA 研修員への研修実施
3. NTT-OB の協力（プロジェクト参加）を得て、インドネシア PT テレコムへの FTTH コンサル実施
4. プータン国派遣の JICA (NTT-OB) 専門家への技術支援実施
5. NTT 持株会社からの要請により中南米チリ国への FTTH コンサル実施

など政府要請による国際協力事業支援、NTT グループ会社の事業支援など、NTT-OB のお力をお借りしながら進めております。

その他、NTT 再編時に NTT 東日本に承継されたベトナムでの固定基本網・事業運営指導、インドネシアでの固定基本網・保守運用等の実績を踏まえ、光アクセスの展開支援等、より広範囲な事業領域においてパートナーシップを維持し、新たな共同事業を立上げ、会社の利益貢献に向け活動を継続しています。

ご承知の通り、ビジネスの世界は、もの凄い勢いでグローバル化が進展しており、中でも、ICT 分野はその勢いが止まりません。NTT グループとしてもグローバルビジネスに力を注いで、世界各地で様々なビジネス展開をしております。一方で、「日本とは異なる劣悪な環境下で業務遂行できる健康体を維持できる」、「文化・習慣が異なる環境下で柔軟な対応ができる」、「現地語等の学びの精神を持ち合わせている」などの人材が求められております。国際協力もビジネスも全ては“人なり”だと思います。ビジネスの素地となるこれらを次世代の若者へ「経験する場を提供すること」が我々の役目の一つではないかと考えます。今後とも、諸先輩方のご指導・ご鞭撻をお願いしたいと思います。

最後になりますが、会員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈りしご挨拶とさせていた

だきます。

特別寄稿

インデントの勝負は見積もりで決まる

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

インデント物を受注しながら事業を続けていく時、その事業の死命を制するチャンスはどこにあるのか、消長を決めるタイミングはどこか。これは、見積もりを整える時、見積もりをして値段を決める時に、その事業の運命は決まる。

したがって、見積もり提出時の勉強の仕方、すなわち最終の値段だけでなく、設計の内容、どうやって作るからいくらでできる、という勉強の浅さ深さで運命が決まる。受注できるかどうか、受注した後の損益も、ここで決まってしまう。

この作業はその機種担当の責任者自身の仕事であって、他人に権限を委譲すべからざる仕事である。また、資材部とは、注文が決まってから物を買うところではない。注文を取るための資材部であると定義しなければならない。

受注以前の設計の内容、それに伴うコストのはじき出し方で運命が決まるが、ただ従来のように、トン当たり何時間で材料がいくらだから、トン当たりいくらという手法でやる限り、いくら時間をかけてもまったく意味がない。

設計のやり方が、パターン・モジュール・ユニットという柔軟性のある標準で割り切られていて、その標準ごとに値段の基礎数字が出ているという整理がされていることが、絶対に必要である。

【石井 孝氏のひと言】

これは、ハード主体の機器、設備にたいする受注生産の成否についてのポイントを指摘したものであるが、性格上、全てが受注生産であるソフトウェアシステムの開発受注に対して、大変示唆に富んだ語録である。

第一に気になる点は、ソフト開発の場合、発注側、受注側が、この語録のような真剣さで、まともな契約に取り組んでいるか、という疑念である。発注側は、システムの内容よりは予算額第一義で、合い見積もりで最低額応札にのみ関心を払っているのではないか。また、受注側も、ともかく、受注することが先決ということで、極めて安易に値決めをしているのではないか。

このようになる原因は、発注側、受注側ともに、ハード製品とは異なり、ソフトの場合は、その製品イメージが具体的に把握しにくいことにあるのではないかと思う。

嘗て「1円応札、1円落札」が往行したが、このような事では、健全なソフト産業は望めず、動かないコンピュータシステムや、システムダウンによる社会的経済活動の停止といった事態はなくなる。

第二の問題は、上記の問題が解決された上でのことかもしれないが、値決めのやり方である。

ソフトウェアの場合、語録が指摘するような、パターン・モジュール・ユニットという柔軟性のある標準で、設計することは、現時点では困難である。しかし、既存の技術資産を再利用することによる設計の合理化は十分可能である。

システム受注に当たって、常に、概要設計、詳細設計、コーディング、各種テストなどの各工程に要する稼働（人月）積み上げて、見積もりを出すのではなく、自社が蓄積してあるソフト資産を積極的に再利用してリーズナブルな価格を算定し、正直に発注側と交渉すべきである。

海外グラフィティ

イチローが嫌いだ！

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智



TVの動画で「イチローが嫌いだ」という4人のアスリートの言葉が話題となっている。

自分も実は「イチローが嫌いだ」。動画のフレーズはおよそ次の通りだ。

- ・イチローが嫌いだ。あの人を見ていると、限界という言葉が言い訳みたいに聞こえるから
 - ・イチローが嫌いだ。あの人を見ていると、自分にウソがつけなくなるから
 - ・イチローが嫌いだ。あの人を見ていると、努力すら楽しまなきゃいけない気がするから
 - ・イチローが嫌いだ。あの人を見ていると、どんな逆風もチャンスに見えてくるから
- 「でも、同じ人間のはずだ」で締めくくっている。

イチローが6月16日に日米通算4357安打を打ち、ピート・ローズの記録を30年ぶりに更新したが、当のローズが、「日米の野球のレベルが違う」ということで、いちゃもんを付けた。

コツコツと安打を打ち続けたイチローは、アメリカの大リーグのみで今度は3000本安打を8月7日に達成している。30人目ということで、殿堂入りも確実視されている。

自分が「イチローが嫌い」な理由は、次の出来事があったからである。

ニュースステーションに出ていた1996年のこと、イチローはオリックスに属していたが、前年に、首位打者・打点王・盗塁王・最多安打・最高出塁率を獲得、まさに「打者五冠王」に輝いたのだ。同じオリックスにいて、1995年に最優秀救援投手と最高勝率で新人王となった平井正史と2人でニュースステーションのゲストで来ていた。

出演者は、オンエアーの前にメイクや着替えをするのだが、問題は、いつもの着替えの部屋をイチローたちのための急きょあてがわれて、自分はモップ洗いや洗濯機の収納されている部屋で着替えをしてほしいということになった。実際は、2人とも、普段のスポーツウエアで来てそのままスタジオ入りしたため、自分が通常使う着替え部屋はつかわな

かったのだ。「それなら、前もって言ってくればいいのに」ということだ。

超人的な安打製造機だったため、イチローはそのころ「サイボーグ」とあだ名されていたが、同時にあまり感情を表にださず、寡黙すぎたためとこともあってそう呼ばれていたのだ。

3000本を達成した時のインタビューでイチローは、「感情を無にしてきたところを、なるべくうれしかったならそれなりの感情を、悔しかった悔しい感情を少しだけ見せられるようになったらいいなと思います」と脱サイボーグ発言をしているのが面白かった。

イチローの人間的な側面をみたのは、ソフトバンクの監督を務めていたことのある秋山幸二との TV 対談の中で、日本の野球殿堂入りした秋山に向かって「2000本安打じゃしょぼいや」と言い、あるいは「大学に行きたかった」と述懐しているのが印象に残った。ただ、大学に行っていたら、あるいは、現在のような成績を残せたかどうかは甚だ疑問である。

今の心境といえば、「50歳まで続ける」と言っているイチローを応援していきたい。

JICA ボランティア募集

JICA シニア海外ボランティア 秋募集 開始

事務局

JICA シニア海外ボランティア秋募集が開催されます。募集受付期間は 9月30日（金）より11月4日（金）迄です。今回募集のタイトルは 「僕達にできることはかならずある」です。

当 ICT 海外ボランティア会関係の皆さんの応募し易いと思われる要請案件を、次表にまとめました。是非参考にさせていただき、応募されますことをお奨めいたします。

この表は、JICA ウェブサイトで公表されたものを要約したものですが、追加が出る場合もあります。応募に当っては、事前に「体験談 & 説明会」に参加されますことをお奨めします。これは全国各地で開催されます。開催日と会場は JICA のウェブサイトでご確認ください。

職 種	国名・派遣先	要 請 内 容
コンピュータ技術	パラグアイ・職業訓練センター	プログラミングの基礎等コンピュータ技術の指導を通じ、教員の指導力向上及び学生の実習内容の改善
同 上	タイ・キングモンクッ	データサイエンティスト育成に携わる活動、ビッグデータを

	ト大学(トンプリ)	扱う実務経験豊富なデータアナリスト
同 上	マレーシア・ 産業訓練校	ソフトウェア開発コースにおいて訓練内容の見直し、 講師に技術指導、訓練生の実習先・就職先開拓、 日経企業との関係強化、
電気・電子 機器	コロンビア・ 高等専門学校	NAO を Robotino に搭載し、双方を連携して動作させるプ ログラム作成に協力、セミナー実施に協力
同 上	ポリビア 大学職 業能力開発校	機材開発活用法のアドバイス、実習機器・機材使用手順 マニュアル作成、研究ゼミの設置支援 等
同 上	ベトナム・ 工業職業短期大学	自動制御分野のカリキュラム作成助言、教師の能力向上 支援、実習方法改善支援
同 上	マレーシア・ 産業訓練校(1)	メカトロニクス訓練内容・使用機器見直し、訓練生の実習 先・就職先開拓、日経企業との関係強化、
同 上	マレーシア・ 産業訓練校(2)	メカトロニクス訓練内容・使用機器見直し、訓練生の実習 先・就職先開拓、日経企業との関係強化
同 上	マレーシア・高等教 育トレーニングセン ター	ロボットオートメーション訓練内容・使用機器見直し、 訓練生の実習先・就職先開拓、日経企業との関係強化
電子工学	カンボジア・ 国立技能専門学校	通信工学の通信理論・アンテナ理論の実験・実習、及び マイクロウェーブ・信号通信のシステムを教官に指導
機械工学	ベトナム・ 工業短期大学	講師・学生にメカトロニクス分野の講義・実習、特に機械・ 制御システムのデザイン・設計技術に関する協力
品質管理・ 生産性向上	コロンビア・生産 性・競争力向上局 (1)	企業や企業支援機関を対象のセミナー実施、企業へ直 接支援・指導、関連資料作成
同 上	コロンビア・生産 性・競争力向上局 (2)	企業や企業支援機関を対象のセミナー実施、企業へ直 接支援・指導、関連資料作成
同 上	コロンビア・生産 性・競争力向上局	企業や企業支援機関を対象のセミナー実施、企業へ直 接支援・指導、関連資料作成

	(3)	
同 上	コロンビア・ 科学技 術センター(1)	中小企業の生産性・品質管理向上人材育成のためのカリキュラム構築、既存教材評価・改定、専門家育成
同 上	コロンビア・ 科学技 術センター(2)	中小企業の生産性・品質管理向上人材育成のためのカリキュラム構築、既存教材評価・改定、専門家育成
同 上	コロンビア・ 科学技 術センター(3)	中小企業の生産性・品質管理向上人材育成のためのカリキュラム構築、既存教材評価・改定、専門家育成
同 上	コロンビア・ 国立職 業訓練庁地域局	家具センターで訓練機材の配置・資機材購入・保管・管理・使用方法等の改善支援
同 上	コスタリカ・ 国立工科大学	顕微鏡研究室にて ISO17025 取得のためのドキュメント作成・訓練・監査、5S 活動のサポート等
同 上	インドネシア・ 国営重工業企業	国内最大級企業において、総合的品質管理を取り入れた経営自実現に向けた指導
渉外促進	コロンビア・ 生産 性・競争力向上局	「品質管理・生産性向上」のボランティア活動を、通訳・翻訳業務を通して支援
渉外促進	コロンビア・ 科学技術センター	「品質管理・生産性向上」のボランティア活動を、通訳・翻訳業務を通して支援

海外技術協力の思い出

インドネシアで電話線路故障対策に貢献

日永インターナショナル（株）特別顧問
庄司 新一

昔から日本の通信に関するメンテナンスに対しての考え方は非常に重要視され、雪国に天皇陛下が行幸されるような場合は夜っぴて住民が裸線の雪落としをして電話の裸線が雪の重みで切れ、通信断になる事を防いだのは語り草になっております。平成元年インドネシア電話線路保守訓練センター（OPMC）プロジェクトのチームリーダーを引き継いだ時は昭和天皇が崩御され、大喪の礼が2月24日に実施されるにあたりインドネシア日本大

使館がその時の通信完全確保に万全を期すため当時のNTTインドネシア事務所も協力したことを記憶しております。

インドネシアは1984-5年当時、電話普及率0.57% (0.57/人口100人) 総電話機67万はアジアで最低に近く、かつ故障率(8/100電話機/月)は非常に高く、又修理に時間(平均6日)がかかっておりました。この故障の90%は電話線路に起因するものでまた保守職員1日1人当たりの修理件数は1.17と低かった。この主原因は障害点探索の測定器が殆どなく切り分け切り分けし場所を特定する。修理方法の標準書が無く間に合わせに修理する。修理材料もほとんど無いので仮修理が多く故障が再発する。また障害点までの移動は保守用車両が無く徒歩・自転車・バスで移動する。修理材料も携帯せずその都度電話局まで取りに帰るような状態でした。

OPMCプロジェクトは1985年日本無償援助(5.57億円)としてEN(交換公文書簡)が結ばれ1986年4月~1990年3月の約束でインドネシア PT. TELKOMの前身のPERUMTEL公社(バンドン)でスタートしました。バンドンのPERUMTEL本社近くに4階建ての局舎を建設、1階は倉庫と訓練施設、2階は保守要員室と装具室、3階は保守管理センターと会議室、4階はプロジェクトチームルームと訓練室を配備しました。供与機材は当時電電公社が電話線路近代化(ラインマンセンター)で使用していた線路保守用機材一式とケーブル類・BW測定器・浸水障害測定器・パソコン・障害修理用軽自動車・建柱車等でした。まずは故障データの収集から始まり・管理・分析・障害点探索・障害派遣用紙の作成・修理材料の選択・在庫管理・故障修理方法等の研修・その教科書作り(英文・インドネシア語)と研修がメイン作業でした。またこのOPMCはバンドンのパイロットプロジェクトを皮切りに全国12か所のWITEL(日本の通信局に相当)に設置する計画がありプロジェクト期間にはこの候補地もチェックしレポートしました。

プロジェクト開始時の目標は4年後(1990年)には

故障発生件数 1月当たり：8件/100電話機 → 5件/100電話機

故障回復時間 : 6日 → 1日(70%), 3日(20%)

1人当たりの故障修理効率：1.17件/日 → 3件/日 とする計画であった。

1990年初めには保守者の技能も向上、修理材料も配備され適切な保守がなされるようになったため、故障率も5件/100電話機/月とプロジェクト開始時の1/2近くなり、故障修理車を配備、修理機材を搭載したため修理時間も1/3近くに短縮され平均2~3日で修理完了するようになりました。

その為この無償プロジェクトはバンドンでのモデルケースとして1990年3月成功裏に終了。PURMTELはこのOPMCを全国展開すべく日本へ円借を申請していたため1990年L/A(借款協定)が結ばれ65.37億円が決定しインドネシア全域に12か所のOPMCを建設する

事となり、プロジェクトのマネージャー・プロジェクト管理は電電公社から派遣されました。

この無償プロジェクト終了後、JICAはこのOPMCプロジェクトをフォローする為個別専門家を派遣することを決定、当時のPURMTEL 保全局長(Mr. Purwo)の推薦もあり筆者がJICA 専門家として派遣され、主として職員の訓練にあたりました。またこの期間に気づいたことは電話加入者が増加し、新設工事が増えているにもかかわらず電話故障率が良くなりませんでした。通常新設の電話の故障は既設の1/10と少なく古くなるに従い故障が多くなるのが普通ですが、建設年度ごとに故障率をチェックしたところ、7-8年前の設備も1年前の新設備も故障率は同じで、新設設備に問題がある事がはっきりしました。

これは建設工法がきちんと形成されていず、且つ建設材料の確保が的確にされていない事・建設業者が育っていない事・工事検査が機能していない事が判明した為これをJICAにレポートし、次期OPCC(電話線路建設プロジェクト)プロジェクトを仕掛けることに成功しました。

最近のインドネシア

NTT 東日本はPT. TELKOMと契約、コンサル業務を実施しており、ジャカルタのメタルケーブルを100%光ファイバーケーブルにすべくNTTのノウハウを伝授しているとの事です。

インドネシアでのエピソード

1989年枝村大使一バンドン工科大学に無償供与した天体望遠鏡を視察に行かれる途中突然一人でOPMCを訪問されました。その節OPMCのご説明・倉庫等をご案内した折、長柄シャベルや長柄こてをご覧になり、これは今でも使用しているのかと質問され山岳部や車の入らない狭隘道路に建柱するとき穴を掘るため使用するとご説明したのを記憶しております。非常に気さくなお人柄でスタッフの同行も無しにJICAプロジェクト現場を視察される大使のフットワークの良さに感心しました。

枝村大使はご帰国後、ソ連大使・ロシア大使をご歴任されました。

元NTT 真藤社長一社長を辞められて数年後、インドネシア・ハビビ科学大臣に要請され森林伐採のための道路新設と森林破壊の関連性の調査をされた直後、ジャカルタNTT事務所でお話を聞く機会がありました。そのとき記憶に残っておりますのは客先から調査や仕事を依頼されたらその結果は速やかにレポートにして提出しなければいけない。真藤さんはハビビ大臣に調査終了日にはレポートを提出されたそうです。

近況

現在日永インターナショナル(株)に勤務しておりますが情報通信プロジェクトが激減

した為、TV 放送プロジェクトを手掛けインドネシア・ブータン・ジブチ・ツバル・ベトナム・パキスタン・ペルー等に出張し工事のプロジェクトマネージャーをしております。

又変わった所では JICA BOP(Base of Pyramid)ビジネス 調査を他に先駆けて受注、タンザニアで地球温暖化対策を担い、エコプロジェクトとも言える籾殻を圧縮・熱処理し固形燃料とするビジネスが当該国でビジネスとなるかどうかの調査を実施、報告書を作成しました。

3.11 地震から 5.5 年

東日本大震災復興行脚 3485km<自転車単独日本縦断>

元NTTドコモ東京料金センター所長 明石公夫

(2016年9月11日で東日本大震災から5.5年になります。被災地は復旧半ばです。本記録は震災の翌年、被災地石巻市出身の筆者が実行した日本縦断自転車旅行記録です。事務局)

東日本大震災の大津波が私の故郷「石巻市」を襲い、4000人もの尊い命を奪った。それから一年半、震災ボランティアは息子たちに任せ、自分は東京にいてただ手をこまねいているばかりだった。自分にも何か出来るはず！一念発起した私は、単独自転車での日本列島縦断「東日本大震災復興行脚」を決意し、実行に移した。

この行脚の目的は、①被災地激励と復興状況の確認、②犠牲になった同級生、友人知人、親戚の供養、③故郷へ寄せられた震災支援の御礼、④大震災の教訓発信…の4つ。69才の誕生日を2ヶ月後に控えた平成24年8月20日、日本最北端の北海道稚内市から、鹿児島県指宿市を目指し、所要日数50日の大震災復興行脚をスタートさせた。周囲から「歳を考えると」の忠告も頂いたが、一度決めたら貫徹するのが俺流のやり方。61歳でスノボを始め、66歳の時にスノボのインストラクター試験に挑戦したが、その時もこの俺流を押し通し、合格に結び付けている。

この復興行脚のために用意したツールは、①「震災復興ガンバロー」、「自転車日本縦断3000km(稚内～鹿児島)」の2本のタスキ、②震災復興行脚の専用名刺300枚(表はタスキと同じスローガン、裏は災害時の心構え3カ条※)、③復興ソング「花は咲く」の歌詞コピー300枚と演奏用ハーモニカ。これらの様々なアイデアやヒントは、スノボ仲間達から貰い、その作成も手伝って頂いた。※ 災害時の心構え…家族を信じ自分の身は自分で守る(原則) ①てんでんこ(バラバラ)に逃げる ②人を待たない・荷物を持たない ③避難場所を決めておき、捜しに行かない

生まれて初めての自転車一人旅である。縦断をサポートするグッズも多岐に亘り、修理工具、簡易テント、サブリ、その他諸々で総重量は 30 kg にもなる。それらを 5 つのバッグに振り分け、骨太の頑丈な自転車に積み込み走り続けた。なお、縦断行脚中はフェリーを除き、自転車以外の交通手段は一切使わなかった。

三陸沿岸の被災地は、草むす家の土台、工場の跡地、うず高く積まれたままの瓦礫が、あちこち、あの時のそのままでも手が付いていない。復興の遅れを如実に感じる。誰もいない港、流された街並みを眺め、亡くなった多くの方々の無念さを思うと、合掌ある



のみ。被災地では、復興工事の邪魔にならないよう配慮しながら、震災のお話を聞いたり、激励したり、黙とうを奉げたりしながらペダルを踏む。運送屋と間違われそうな沢山の荷物、6 個の赤色灯を点滅させて走るパトカーもどきの自転車は、ひと際目立つ。それに加え、派手なコスチュームと二つのタスキ、おまけに真っ黒に日焼けした顔、体は異様だ。その異様さのお陰で多くの方から話し掛けられ、会話のきっかけが生まれた。

毎日立ち寄るコンビニや食堂、道の駅、観光地、宿泊先等では名刺を配り、災害時の心構えを熱く説き、同時に震災支援の御礼も申し上げる。私が石巻市出身と言うと、皆さん熱心に耳を傾けてくれた。また、人が集まる観光地では、復興ソング「花は咲く」をハーモニカ演奏するが、亡くなった同級生や荒廃した故郷を思い出しては涙し、演奏を中断してしまうことも度々あった。

この縦断では日本人、日本民族の温かさ・慈しみのシャワーを毎日浴びた。そのほんの一部を紹介すると…… 長い峠越えの疲労と空腹で動けなくなっているのを見て、自宅に戻っておにぎりを作り、差し入れてくれた南三陸町の主婦。先回りの待ち伏せでドッキリの、嬉しいサプライズ激励をしてくれた友人もいた。「応援の気持ちだ」と言って、ランチ代金を受け取らなかった食堂のご主人……。枚挙にいとまがないほど、こんな親切・思い遣りを受けながら自転車を走らせるが、感謝の涙が溢れ、前が見えなくなってしまう。

それなりの危険を覚悟した復興行脚だが、道中は全く予期せぬ転倒やケガ、自転車の故障に見舞われた。また、この縦断で最も肝を冷やしたのは、暗くて狭くて長いトンネルだ。後方から大型車が迫って来ると、緊張と恐怖で顔がこわばり、生きた心地がしない。死と隣り合わせの毎日が続く。そんな中、常に頭をよぎるのは、3000km・50 日間を走り切る体力を維持出来るかの心配だった。その心配に追い討ちをかける試練が、随所で待ち構えていた。暑さ、向い風、雨、2 度の台風、また、延々と続くきつい峠、加えて 30 キロの荷物の重さが、老人の体力を容赦なく奪っていく。それでも負けじと、顔を歪め、喘ぎな

がらパワー全開で、こつこつ一輪、また一輪と山を登り、地道に距離を稼いで行く。こんな非日常の体験を毎日積み重ねながらの、まさに「雨だれ石を穿つ」の挑戦が続く。

そんな苦しくて折れそうになる老人を奮い立たせてくれるのが、固唾を呑んで見守る仲間、家族、多くの協力者のメール、ブログ等の応援激励だった。その応援激励が、モチベーション維持に大きな役割を果たし、私の背中を押し続けた。泊まった民宿、ホテル、また、修理で立ち寄った自転車店等では、災害時の心構え3カ条を大書してフロントに掲出したり、HPで紹介したり、従業員の災害訓練に使うとも言ってくれた。復興行脚が無駄ではなかった、報われたと思う瞬間であった。

稚内をスタートして52日目、膨大な時間とエネルギーを費やし、最終目標地点の^{いぶき}指宿市に到達し、目的を果たした。その後、更に熊本まで北上し、トータル3,485kmを走り切り、大震災復興行脚が幕を閉じた。事を為すに、強い意志だけでは目的目標を達成することは出来ない。仕事やスポーツ、趣味等の世界においても、周囲に協力者、応援者、理解者が大勢いればいるほど、物事の完成度、成功率は飛躍的に高まる。そういう意味において、人と交わることを面倒くさがらず、積極的に接する、常に人間関係を豊かにしておくことが、事の成就を左右する、とても大切なことと考えている。



この復興行脚を誰かがどこかで、いつも見ていてくれた。縦断中は熱い友情に泣き、また、全国各地で数え切れぬ人情に触れ、何度も泣いた。気仙沼市長の言葉がある…『被災地を忘れないで下さい。誰かが見てくれていると「よし、もっと!」と言う気持ちになれる。本当に忘れられたら、最後の頑張りが効かない』……。この言葉を胸に刻み、私たちは被災地の復興を末永く見守り、支援を続けていく必要がある。



第25回海外情報談話会模様

事務局

標記談話会は、平成28年9月8日(木)、初めてお借りしましたNTTコムウェア本社1F会議室(NTT品川

TWIN アネックスビル品川) で開催されました。参加者は多く 42 名でした。

演題は「クラウド時代のセキュリティー世界の動向と日本の活動」で、講演者は吉田 眞氏 (東京大学名誉教授 日本クラウドセキュリティアライアンス会長) 及び勝見 勉氏 (日本クラウドセキュリティアライアンス理事) のお二人でした。

講演の概要は次のようでした。

近年、ICT の進展・深化によって、IoT / M2M、モバイル、ビッグデータとその分析、これらを総合化して価値を創出しサービス化を行う、クラウドやソーシャルの進展が目覚ましい。



これらは、ますます進展するデジタル経済・社会を担う基本要素であり、このような複合要因のシステムを安全に安心に利用し運用していくために、全体を見通した総合視点からのセキュリティー確保の重要性が特に認識されています。

そのようなことから クラウドセキュリティーのガバナンスに対する国際的視点からの活動について、世界の動向、日本における活動状況と今後の課題について、具体的には「クラウドの構造と特徴」「クラウドコンピューティングの利点とインパクト」「クラウドのセキュリティーの問題点」「セキュリティー諸基準とクラウドセキュリティーの諸基準」に引き続き、「世界の動向 - 総合的なグローバル活動 CSA (Cloud Security Alliance) の狙いと、検討課題及び各国機関の協力・連携)」「日本における活動 - 日本クラウドセキュリティアライアンス (CSA-JC) の活動状況、日本における研究・開発活動、国際・社会への貢献」を紹介していただきました。講演後の質疑でも本質をついた応答が多くありました。

後刻当会石井顧問から facebook へ次の投稿がありました。『吉田眞先生による、真に巧みな、文明論から説き起こしたセキュリティーの必然性とその重要性の話をイントロに、勝見勉先生によるクラウドセキュリティーガバナンスの問題について、突っ込んだ極めて興味深いお話であった。』

コンピュータとソフトウェアによるネットワークによって社会機能が構築され、運用される 21 世紀に於いて、セキュリティーの問題は単に重要などと言ったものではなく、国家組織の死活に関わる問題である事を再認識した。これからの戦争は、人の殺し合いではなく、恐らく、サイバーアタックがキーになるのではなかろうか。



吉田先生はセキュリティー対策の要点は「継続的な組織力の向上」であると指摘されたが、全くその通りであると思う。国 (政府) をあげて、組織的この問題に真剣に取り組むべきである。』 (文中一部省略、事務局)

また、参加者からは『日々の仕事の中ではわからないクラウドのセキュリティーについての全体像についてのお話をお聞きすることができて大変参考になりました』、『興味津々

に聞かせてもらいました。クラウドについて話としてはたびたび耳にするのですが、表面的な知識ばかりで、今回のように制度的な話まで踏みこんだ話を聞いたのは初めてです。このような機会をつくっていただき、どうもありがとうございました。』等の反響がありました。将に感銘深い講演会でした。

第26回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会
協賛 情報通信国際交流会

第26回海外情報懇談会は下記により開催されます。参加下さいますようご案内いたします。

日時：平成28年10月14日（木）午後3時～5時

会場：NTTコムウェア本社1F会議室
（JR品川駅下車 港南口改札口より徒歩7分）
（地図ご参照下さい）

東京都港区江南1丁目9番1号
NTT品川TWINアネックスビル1F

題目：NTTコムウェアの状況と戦略

講演者：海野 忍氏
NTTコムウェア株式会社 代表取締役社長

概要：

NTTコムウェアは、NTTグループ各社が利用するソフトウェアを開発することを主たるビジネスにすべく設立されました。NTTグループの中における位置づけ、これまでの業績、最近の戦略などを紹介いたします。

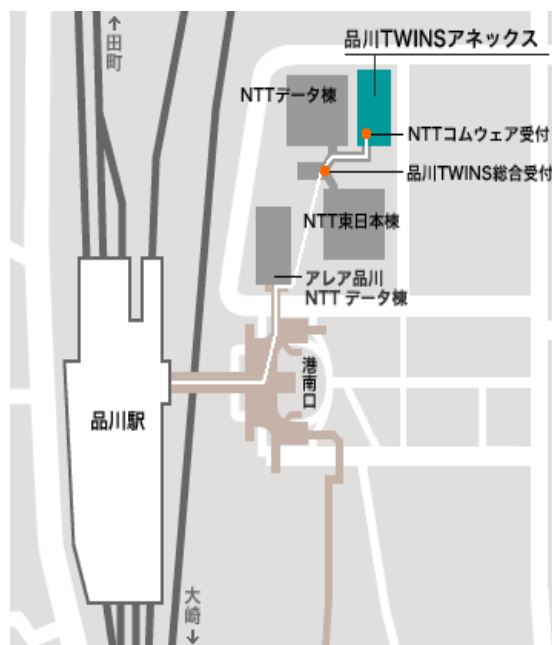
本講演では、まず弊社の過去を振り返り、どんな問題があったのか、その原因はどこにあったのかを分析します。

次にNTTグループの中で弊社に課されたミッションを遂行する上での困難な状況をお示しし、それに対する対策を説明させていただきます。

さらに社の長期計画の考え方、中期計画の内容を紹介した上で、将来目標を示す予定です。また、社の中で現在実施されているマネジメント手法についても紹介しますので、皆様の参考にしていただければ幸いです。

昨今取り組んでおります新ビジネスについてもご紹介いたしますが、それらのいくつかについては、デモンストレーションもご覧いただこうと考えております。

どうぞ、ご期待ください。



参加：入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 kato2415@jasmine.ocn.ne.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆 (kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) , または
村上勝臣 (katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp) までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 今号も内容が充実した会報になりました。ご寄稿をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。それぞれが含蓄のあるご寄稿で、長いご経験とご見識が滲み出ており、感慨深いものと存じております。次号以降へのご寄稿も多くいただいており感謝に耐えません。
- ・ 宮城県育ちの私は、「東日本大震災復興脚 3485km<自転車単独日本縦断>」のご寄稿をいただきました明石公夫様の心境を共有できる 1 人です。私は「鎮魂の一人歩き旅」をし、津波で災害を被った 塩釜－松島－東松島－石巻－南三陸町の 80 Km の海岸線をとぼとぼ歩きました。かつて利用した仙石線のホームや路線が跡形もなくなっているなど 津波の恐ろしさを目の当たりにし、また昔の面影が亡くなった風景や瓦礫の山を見て落涙を禁じ得ませんでした。又現地の方々に当時の様子を伺うことができました。皆さんとても親切で、逆に私が励まされる思いでした。先日仙石線も開通したとのこと。一日も早い復興を祈っております。

(以上 加藤)

- ・ 石井さんの「真藤語録」 今回の話題は「インデントの勝負は見積もりで決まる」今回はインデント発注を受けた場合のソフト開発の場合について、考察していました。『発注側が、納得の行く積算根拠を示して、交渉する事が基本である』。相当努力されたと感じました。
- ・ 田上さんの海外グラフィティ「イチローが嫌いだ！」寄稿していただきました。スポーツの秋に相応しい話題でした。田上さんには次号にも寄稿して頂く予定です。ご期待ください。
- ・ 明石さんに「3.11 東日本大震災」に関する寄稿をして貰いました。私も当時地域の人間として有難く感じました。機会を捉え「阪神淡路段震災」「熊本地震」のことも伝えて行きたいと考えております。

(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆
編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣
報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会